日記に見える民俗

後藤　重巳

近く、本学付属博物館から、豊前国下毛郡西屋形村の庄屋記録『記録并聞書扣帳』（一八〇ページ）が刊行される。この記録の中には、玖珠郡九重町の「田野長者跡七不思議」の話や、筑後地方に雀が集まって、「雀の合戦」をしたために、下毛地方の雀が、一時、全く居なくなった話、また、下毛地方に「山犬」が出没し、ひとを喰い殺した話が多く記録されている。雀にかかわる民俗は、日本中、広範な地域で見聞され、注目に値するところであるが、それは雀が「里の鳥」であり、人びとの生活と密接なかかわりを持っていたからに外ならない。民衆史を考える上で、こうした記事は見逃し難いものである。

原稿募集

国史纂集第一〇号の原稿を募集しております。小論・書評・近況報告など気軽に御投稿ください。特に〇Bのお便りをお待ちしております。締切は七月一日

新刊紹介

多田仁編『史朋』創刊号

別府大学史学科学生研究会

・多田仁「会の発足にあたって」
・別府大学史学科学生研究会規約
・多田仁「細石刃文化期の技術革新」
・辻本励「汗血馬―武帝期における馬の東西交易と対匈奴政策―」
・藤咲高志「竹林の七賢に関する一考察―ケイ康を中心として―」
・井上和幸「天平宝字八年十月の宣命を中心とする皇権の一考察」
・宮下貴浩「下城式土器研究の現状と諸問題―北部豊前から豊後地域を中心に―」
・宮原司「日本古代の学制改革―文章道発生の要因―」
・編集後記
・役員構成

後藤重巳・神野哲編『本耶馬渓町史』

本耶馬渓町発行

〔目次〕通史篇（原史＝執筆者；賀川光夫（第一章先史時代の本耶馬渓・第二章本耶馬渓の縄文文化・第三章枌洞穴遺跡の葬制）執筆者；橘昌信（第四章枌洞穴遺跡の土器）執筆者；賀川光夫（第五章枌洞穴発掘によって得られた二、三の問題）執筆者；内藤芳篤（第六章枌洞穴の人骨）〉〈古代史＝執筆者；森猛（第一章大化前代の郷土・第二章律令体制の成立・第三章律令体制の動揺・第四章宇佐氏の発展と下毛庄）〉〈中世史＝執筆者；後藤重巳（第一章中世世界の展開・第二章南北朝期の郷土・第三章戦乱の舞台）〉〈近世史＝執筆者；後藤重巳（第一章近世初期の郷土・第二章奥平氏の中津藩と天領・第三章産業と交通・第四章打ち続く天災と農民生活・第五章幕末期の世情と郷土）〉〈近現代史＝執筆者；今永清二（第一章明治維新と社会変革・第二章廃藩置県と近代化・第三章明治新政とその矛盾・第四章近代化の進展・第五章近代化と戦時体制下の郷土・第六章現代と本耶馬渓町）〉〈各論篇（地誌＝執筆者；兼子俊一（第一章位置）執筆者；千田昇（第二章地質・地形）執筆者；川西博（第三章気候）執筆者；勝目忍（第四章農林業）執筆者；出田和久（第五章商・工業・第六章観光）執筆者；兼子俊一（第七章交通・第八章人口）〉〈文化財・民俗・人物誌＝執筆者；伊藤勇人他〉

奥田忠『廣瀬井堰・近世偉人・郷土恩人、南尚翁（一郎平）』

奥田氏が所蔵する南翁の書簡集。南一郎平は天保七年、市郎兵衛宗保の長男として豊前国金屋に生まれた。当時、金屋村と近隣数か村は水利の便がきわめて悪く、幾たびか水路開削が行われたが、そのつど失敗に終わっていた。元治元年の大旱魃を契機に一郎平は用水開削を行い、政府の援助のもと苦難のすえ通水させた。これがいわゆる広瀬用水である。その時松方正義に抜てきされ、安積疏水をはじめ那須疏水・琵琶湖疏水などにかかわった。

編集後記

国史纂集を復刊しようという声がたびたび浮上したが、いつの間にか沙汰止みになってしまう。この度、後藤先生のよびかけによって、ようやく実現するはこびとなった。おぼつかない手つきでワープロのキーをたたく。不慣れな割付作業にも取り組んだ。次号は九月発行の予定。今度はもう少し要領よくやれるだろう。不器用な編集子のためになるべく早く原稿をお寄せください。（森）

『国史纂集』　第九号
一九八九年五月十五日発行
編　集　後藤　重巳
　　森　猛
発行者　後藤　重巳
発行所　別府大学文学部史学科
　　日本史研室
〒八七四　別府市北石垣八二
電話〇九七七―六七―〇一〇一